

中国社会科学学会 2019年度大会

会場：東京大学文学部 1 番・2 番大教室（法文 2 号館 2 階）

主催：中国社会科学学会 Tel:03-5841-3746, Fax:03-5841-3744, E-mail:shabun@hyper.ocn.ne.jp

参加費（シンポジウム資料代）1,000 円 非会員の来聴歓迎

2019 年 7 月 6 日（土）自由論題報告

第一会場 1 番大教室 13:30~17:10 司会：平野 聡（東京大学）

元代の曲阜孔廟をめぐる東平儒士の活動 ……………牛 瀟（明治大学院生）

コメンテーター：水口 拓寿（武蔵大学）

清代初期学問の変容——李塨『大学辨業』をめぐる ……………胡 藤（東京大学院生）

コメンテーター：伊東 貴之（国際日本文化研究センター）

清末における「官報」の発行と政府による情報発信の変容 ……………殷 晴（東京大学院生）

コメンテーター：村田 雄二郎（同志社大学）

中国の「開発」概念の生成と変容——歴史における語義の変化をめぐる ……汪 牧耘（東京大学院生）

コメンテーター：齋藤 希史（東京大学）

第二会場 2 番大教室 14:20~17:10 司会：鈴木 将久（東京大学）

橘樸の中産階級革命論——理論構造の形成と「統一戦線論」との比較 ……………趙 東旭（明治大学院生）

コメンテーター：深町 英夫（中央大学）

理性／非理性をめぐる攻防——穆時英「暇潰しにされた男」における男女の恋愛の時代的意義

……………田中 雄大（東京大学院生）

コメンテーター：佐藤 普美子（駒澤大学）

中国革命における「戦闘的」芸術と「牧歌的」芸術の間に——延安の中国新興木版画運動を中心に

……………陳 琦（東京大学院生）

コメンテーター：瀧本 弘之（著述家、中国版画研究家）

会員総会 17:20~17:50 1 番大教室

2019 年 7 月 7 日（日）

シンポジウム 世界哲学としての中国哲学

1 番大教室 10:00~16:30

午前の部：10:00~12:15

総合司会・企画趣旨説明：中島 隆博（東京大学）

基調報告：10:15~12:15

1. “Chinese Philosophy as World Philosophy” ……………李 晨陽（南洋理工大学）

2. 中国哲学のチャンスと哲学の歴史性 ……………張 志強（中国社会科学院）

コメンテーター：納富 信留（東京大学）、石田 正人（ハワイ大学）

懇親昼食会 12:15~13:15（2 番大教室） [会費 1,000 円]

午後の部：13:15~16:30

個別報告：13:15~15:15

1. 世界文献学から見た清代哲学の「言語論的転回」 ……………石井 剛（東京大学）

2. 儒教を媒介とするヨーロッパ・日本・中国の近代化 ……………井川 義次（筑波大学）

3. 論理学者にとっての中国哲学——金岳霖、沈有鼎を中心に ……………志野 好伸（明治大学）

4. 東アジア哲学の理念と牟宗三 ……………朝倉 友海（神戸市外国語大学）

コメンテーター：納富 信留（東京大学）、石田 正人（ハワイ大学）

総合討論：15:30~16:30

基調報告・個別報告報告者・コメンテーター

◇元代の曲阜孔廟をめぐる東平儒士の活動

牛 瀟

〔報告要旨〕東平学、または東平学派と呼ばれた儒士の集団は、山東地域に以前からあった学問に基づいて、金末の漢人軍閥の一人である嚴実によって建てられた東平府学を出た人物たちから成る。元初の中統・至元年間、東平学派の儒士が多数元代政治の場で活躍し、モンゴル皇帝へ儒教尊崇や制度確立等を進言した。東平の儒士に関しては、学問と教育を中心に一定の研究蓄積があるが、儒教制度に関する彼らの建言や活動等はまだまだ十分に検討されていない。

本報告では、曲阜孔子廟に保存された金元代の碑刻に注目し、東平の儒士たちが元代の曲阜孔廟代祀に参加し、儒教制度の確立を推進した事例を明らかにする。さらに、同時代史料として碑刻が持つ客観的な特徴を利用しつつ、曲阜孔廟の変化や北方儒学の実態・儒士の政治活動などを考察する。文化が激しく変動した元の時代に、東平の儒士が積極的に政治に参加したことの検討を基礎として、政治と文化・学問の関係について考える。

〔報告者紹介〕牛瀟（ニュー・ショウ）、1994年生。明治大学大学院文学研究科史学専攻（アジア史専修）博士前期課程修了。現在、同博士後期課程在学。専門は中国元代史。曲阜孔廟及びその碑刻を主な研究対象として元代の文化・社会や儒教の変遷を分析している。

◇清代初期学問の変容——李塏『大学辨業』をめぐる

胡 藤

〔報告要旨〕本報告は「顔李学派」の後継者と見られる李塏の代表作である『大学辨業』とその思想を検証することである。従来の思想史叙述では、李塏は常に顔元を基準として分析・比較され、顔元より「保守的」で、「退歩」したと低く評価する傾向が強かったが、彼とその時代との関連性についての研究がまた不十分である。李塏が陸世儀の『思辨録』を読んで「大学の法（具体的施策）」の欠如を痛感して『大学辨業』を書いた。孔穎達等の『礼記正義』における注疏に基づき、朱熹、王陽明などの解釈を批判しながら、彼なりの「大学」論を展開させた。報告では本書の内容を中心に、同時に書かれた『小学稽業』などを参照しながら、この中で現れた学問と政治の構想を検証していきたい。それにより、「実用の学」と考証の方法との折衷的態度を取った李塏の思想の実態を明らかにし、この時代における思想転換の一端を窺うことができよう。

〔報告者紹介〕胡藤（こ・とう）、1989年生。専攻は近世中国思想史。中国武漢大学文学部卒、同大学院中国哲学専攻修士。現在、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学。

◇清末における「官報」の発行と政府による情報発信の変容

殷 晴

〔報告要旨〕本報告は、政府による情報発信の変容という視点から、清末における「官報」発行の歴史的意義を考察するものである。「新政」が推進されていた1902~1911年、清朝の各省政府と中央政府はそれぞれ「官報」と題する機関紙を創刊した。これらの「官報」については、先行研究では政府の宣伝機関として位置づけており、否定的な評価を与えている。しかし、情報発信に対し、それまで受け身の姿勢にとどまっていた清朝政府が積極的な姿勢に転換していったという点こそ、近代国家建設の試みの1つだと考えられる。また、中央政府の「官報」は、最終的に「法令公布機関」という位置づけを与えられ、民国期の『政府公報』の基礎を築き上げた。本報告では「官報」創刊の歴史的背景を整理した上で、その具体的な発行状況と法的位置づけの確

立過程を解明する。これにより、清末の政治文化の一端を明らかにしたい。

〔報告者紹介〕 殷晴（いん・せい）、1989年生。専攻は中国近代メディア史。北京大学新聞与伝播学院卒。現在東京大学人文社会系研究科博士課程在学。日本学術振興会特別研究員（DC2）。主要論文「提塘からみた清朝中央と地方の情報伝達」（『東洋学報』99巻3号、2017年）、「清代における邸報の発行と流通——清朝中央情報の伝播の一側面」（『史学雑誌』127巻12号、2018年）。

◇中国の「開発」概念の生成と変容——歴史における語義の変化をめぐって

汪 牧耘

〔報告要旨〕人間の能動性や自然との関係の一側面を描き出している開発概念は、中国ではどのような文脈で産み出されたのか。またどのような社会的背景によって、資源の発掘や産業の構築といった意味合いへと限定されるようになったのか。本報告はこうした問いをもとに、中国語の「開発」という言葉を手がかりにし、その語義の変容を整理する。歴史経緯を見ることで明らかになったのは、今日普及している「開発」の一般的な理解は20世紀半ば以降に定着してきたものである。それとともに、ありのままの力や価値を引き出すという「開発」の古来のニュアンスが封じ込められる結果となっている。本報告は、中国語の「開発」が有していた豊かな発想を掘り出し、それらの発想が近代化の波に翻弄される過程を描き出すことで、欧米中心で行われてきた開発の理論や概念研究と異なる文脈を示すことを試みる。

〔報告者紹介〕 汪牧耘（おう・まきうん）、1991年生。専攻は国際協力学。法政大学国際文化研究科修士修了。現在東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程在学。主要論文「中国・石門坎の観光資源化プロセス——政府と諸アクターの相互作用に着目して」（『白山人類学』22、2019）。

◆自由論題報告 第二会場 7月6日（土）14:20～17:10 2番大教室

◇橋樑の中産階級革命論——理論構造の形成と「統一戦線論」との比較

趙 東旭

〔報告要旨〕橋樑（1881–1945、たちばな しらき）は、ジャーナリスト、中国研究者である。大分県に生まれ、1906年に中国に渡った。そこに凡そ四十年間滞在して、中国社会の各方面をめぐって研究を展開していた。中国の国民革命（1924–1927）の前夜に、中国革命の進み方について、「中産階級革命論」という構想を提示し、大量の論説を発表しながら革命の進行に同行することになった。1931年の「満洲事変」をきっかけとして、中国革命の支持者から関東軍の協力者また満州建国のイデオログに変わった。それはすなわち橋の「方向転換」である。先行研究は常に、彼の「方向転換」を国民革命の失敗と関連付けて論じていたが、彼が提示した中国革命の進み方及びその背後に潜んでいる彼の中国認識は、如何に当時の国共両党の掲げていた「統一戦線論」と異なったか、ということはほとんど言及されていない。筆者は、この問題に着目し、橋の思想の構造を究明することを通じて、彼の「中産階級革命論」が内包している問題を明らかにしてみたい。

〔報告者紹介〕 趙東旭（ちよう・とうきょく）、1988年生。専攻は日中近代思想史。中国河北科技大学文学部卒。現在明治大学大学院教養デザイン研究科博士課程在学。主要論文「橋樑の生命主義とその展開について——「東洋改造論」に到る道一」（『教養デザイン研究論集（明治大学大学院）』第14号、2018年9月）、「橋樑思想の形成——大正生命思想と療養経験について——」（『教養デザイン研究論集（明治大学大学院）』第15号、2019年2月）など。

◇理性／非理性をめぐる攻防——穆時英「暇潰しにされた男」における男女の恋愛の時代的意義

田中 雄大

〔報告要旨〕 穆時英（1912-1940）は新感覚派の名手・モダニズム作家（現代主義作家）として評価されているが、穆の小説は斬新な文体をその特徴とする一方、その大部分のストーリーは極めて単純な男女の恋愛が主軸となっている。先行研究はそうした恋愛を当時の都市文化を示す一例として論じてきたが、そこでは恋愛関係を個別の小説のストーリーとして扱う視点が常に抜け落ちてきた。

従って本報告では、男女の恋愛を基軸とする穆時英のテキストの中でも最も早くに書かれた「暇潰しにされた男」（1931）に着目し、①二人の登場人物が相互に影響を与える場として恋愛関係が機能していること、②その場において男性主人公の理性的な振る舞いが揺らぐこと、③その揺らぎが線的時間に代表される近代的な価値観への反応であることを指摘する。また穆時英研究の常套句である「モダニズム（現代主義）」という用語についても、本報告における具体的な分析結果を踏まえながら批判的検討を行う。

〔報告者紹介〕 田中雄大（たなか・ゆうた）。専攻は中国近現代文学、特に中文モダニズム文学と文学史。東京大学教養学部卒。現在東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学。主要論文「穆時英「上海のフォックストロット（ある断片）」における視覚性——風景描写および「映画的」要素の検討」（『言語態』17, 2018年）、「男根的構造から根茎的読解へ——謝裕民「アンボン休暇」における根探しと Sinophone Literature」（『言語態』18, 2019年）など。

◇中国革命における「戦闘的」芸術と「牧歌的」芸術の間に——延安の中国新興木版画運動を中心に

陳 琦

〔報告要旨〕 1930年代以降の中国新興木版画運動は、国統区と解放区という二つの地域において、それぞれ「戦闘的」と「牧歌的」という正反対の創作スタイル（あるいは画風）を示したため、これまで主に中国共産党が統治した地域の優越性と国民党が統治した地域の非人間性という、単純なプロパガンダ策略上の対比として解釈されてきた。つまり、平和な解放区と暗闇と抗争しなければならない国統区という対立像が、共産党系の木版画家によって意図的に構築されてきたのである。本報告は、解放区の延安における木版画創作の「牧歌的」な様態に関して、プロパガンダ説を踏まえた上で、同説には回収しきれぬいくつかの形成要因、例えば読者層の変化、延安における政治運動の展開と文芸政策の転換、日中戦争の深刻化に伴う共産党政権の自己定位の移行、中国民間美術の固有性格などの面から、再検討を行いたい。

〔報告者紹介〕 陳琦（ちん・き）、1993年生。専攻は近代日中美術史。中国廈門大学日本語文学部卒。現在東京大学総合文化研究科超域文化科学博士課程在学。

シンポジウム
世界哲学としての中国哲学

2019年7月7日(日) 10:00~16:30 1番大教室

企画の趣旨

中国哲学はいま世界的な再編期に入っている。文学や歴史学に比べるならばやや遅いと思う向きもあるかもしれないが、ようやく「哲学の脱植民地化」が始まろうとしている。その一つとして、地域哲学としての中国哲学を問い直し、世界哲学の一翼を担うものとして再定義することが試みられている。すなわち、中国哲学の地域的特殊性を強調してきた中国哲学研究から、普遍に開かれ、普遍に向かって問いを投げかける、哲学としての中国哲学研究へと変化しているのである。とはいえ、ここでいう「普遍」は従来の安定した普遍ではない。普遍の語り方自体が問い直されているのであり、それによって普遍の内容もまた変容していく。さしあたり、**gerund** としての **universalizing** が問われていると言っておきたい。これはまた同時に、従来の「特殊」を考え直すことでもある。すなわち、「在来の理論 **indigenous theory**」をどう評価し直すのか、どう尊重するのかが問われているのである。

言うまでもなく、「世界哲学」という概念はまだ十分には練り上げられていない。「世界文学」や「世界史」という試みに刺激を受けながらも、哲学である以上、「世界」という概念を素朴な仕方では前提することはできない。「世界は存在しない」(マルクス・ガブリエル) という言説に代表されるように、「全体性」としての「世界」は批判され続けているからである。では、「全体性」に対置される「世界」とは何であるのか。それは「無限」(エマニュエル・レヴィナス) なのか、それとも別の概念なのか。

以上のような問題意識のもと、このシンポジウムでは、中国哲学をより広い文脈に置き続けて考えてきた二人の基調講演者に発題をお願いし、それに対して、世界哲学について考えてきた二人のコメンテーターに応答を試みていただく。それを受けて、各報告者にはそれぞれの研究分野から、地域研究としての中国哲学を乗り越える視座を提供してもらい、さらに二人のコメンテーターから応答をいただく。総合討論はこうして得られた論点を整理し、「世界哲学としての中国哲学」のための新たな視座を開いていく。

なお、このシンポジウムは、東アジア藝文書院、科研費基盤研究(B)「東京学派の研究」、科研費基盤研究(B)「グローバル化する中国の現代思想と伝統に関する研究」が共催するものである。

報告要旨

午前の部 (基調報告) : 10:00~12:15

“Chinese Philosophy as World Philosophy”

李 晨陽 (南洋理工大学)

“Chinese philosophy as a world philosophy” can mean two related yet different phenomena.

First, it can mean Chinese philosophy as a philosophy from China, among philosophies from other parts of the world, such as Indian philosophy and Japanese philosophy. In this sense, we can find it in such places as the *Oxford Handbook of World Philosophy*, where “world philosophy” means philosophies in various parts and traditions of the world. In this sense, one could think of the panda in China and the koala in Australia as its counterparts in the animal kingdom. Second, “Chinese philosophy as a world philosophy” stands for an ambitious movement to place Chinese philosophy, mainly Confucianism, Daoism, Mohism, Chinese Buddhism, etc., on the world stage, not as a geographic cultural representation, but as a philosophy whose relevance extends beyond its geographic origin, to be studied, examined, developed, and advanced anywhere in the world as a cross-cultural enterprise. In this sense, one can think of Greek philosophy (e.g., Plato, Aristotle) as a counterpart of “Chinese philosophy as a world philosophy.” These two meanings of “Chinese philosophy as a world philosophy” are related in that “Chinese philosophy as a world philosophy” in the second sense nevertheless has its roots in “Chinese philosophy as a world philosophy” in the first sense. My discussion in the essay is primarily focused on the second sense, even though I will touch relate my discussion to the first sense when needed.

In this presentation, I will argue for three points. The first point is on the need for making Chinese philosophy a world philosophy. In a global area, cultural competence has become necessary for people to function well in the world and Chinese philosophy is an important tool for people to acquire cultural competence. The second point is that doing comparative philosophy is the most important way to study, examine and develop Chinese philosophy as a world philosophy. As a cultural bridge, comparative philosophy is not merely a “philosophy of comparison.” More importantly, it is a comparative study of philosophy, or more accurately, comparatively philosophizing. Third, in order to promote Chinese philosophy as a world philosophy, we should not overemphasize the importance of the connection between philosophy and history. As a cultural product, philosophy cannot be separated from history. Yet, how much knowledge of history is needed in order to understand a philosophy is a matter of degree. As important as it is, overemphasizing the historical contexts makes it difficult for beginners to learn Chinese philosophy. A good balance is needed. Finally, I will use harmony (*he*) as an example to show how Chinese philosophy can make important contributions to advancing world philosophy in this global area.

純粋に哲学的な方法、あるいはギリシャ哲学的もしくは西洋哲学的な方法を用いて中国的原理（原文は「中国道理」。以下同じ）を説明することと、一般的な意味における「中国哲学」とは、中国哲学の二つ異なるあり方である。厳密にいうと、中国における哲学の形態は、隠れて姿を現していない状態にある。葉秀山の言葉でいうと、中国において哲学は、実際にはあるが名づけられていないものだ。そのため、中国哲学とは、哲学的な方法によって絶えず「自在」から「自為」へと向かわなければならないような思想形態のことなのである。これは一般的な意味での「中国哲学」とは別物である。一般的な意味での中国哲学は依然として、経史と義理の伝統の内側で議論されるものである。今日の中国では、両者の関係に対して、ますます明確な区別が現れるようになってきた。ある意味で純粋な中国哲学は一種の解釈であると同時に一種の構築でもある。それは哲学の共通言語によって中国的原理を闡明するものだが、この闡明が可能になり自家撞着を起さないのは、哲学それ自体が変化したからである。この変化はちょうど、純粋な中国哲学にチャンスを与えた。十数年前に中国哲学界で起きた中国哲学の合法性をめぐる討論の結論は、中国に西洋的な意味での哲学はないということだった。そして、それに伴い「儒学」ブームが発生した。しかし現在では、西洋現代哲学への認識とりわけ時間性に対する自覚によって、哲学的な方法は、中国的原理を改変しないという前提のもとで、いわゆる中国哲学を語るができるようになってきている。この可能性の現れはまさに哲学の「歴史性」の真の現前である。本稿は、今日において哲学的な方法をもって中国的原理を論ずる二人の哲学者、葉秀山と趙汀陽について集中的に分析を試みたい。この二人は中国社会科学院哲学研究所におけるわたしの先輩でもあり、この分析を通じて、中国哲学のチャンスに関わる問題の解明を試みたい。

午後の部（個別報告）：13:15～16:30

世界文献学から見た清代哲学の「言語論的転回」

石井 剛（東京大学）

清代における音韻学の隆盛を「言語論的展開」とみなして、そこに清代特有の哲学の姿を見出そうとする議論は、日本においては濱口富士雄氏らによって夙に理論化されてきた。中国においても呉根友氏をはじめとする清代哲学研究グループが提唱している。一方、ベンジャミン・エルマンが指摘したように、清代学術（樸学）の学風は「フィロロジ（文献学）」と多くの点で共通する一方でずれを有している。シェルドン・ポロックらは近年「世界文献学」なる方法論を提唱し、清代学術のユニークさは世界史的文脈のなかで再解釈されようとしている。

本報告では、こうした趨勢を念頭におきつつ、清代における「言語論展開」の意味を再考察してみたい。その先には、「サイノフォン哲学」の可能性を展望することになるだろう。

儒教を媒介とするヨーロッパ・日本・中国の近代化

井川 義次（筑波大学）

ドイツ観念論やフランスの合理主義を用意したのは、人間理性能力を尊重し、神を背景に退かせた啓蒙思想であった。東亜諸国は、近代西欧思想をいかに血肉化したのか、あるいは既存の思想枠組みをもってどのように咀嚼したのか。西欧近代受容の研究には、この二つの側面からのアプローチが考えられるであろう。西欧近代の思想を受容しようとした日本の幕末・明治期の西周、井上哲次郎や中国清末民国初の知識人は、儒教、とりわけ宋明理学の教養をもつ者たちであった。彼らは西欧近代の諸思想に自ら学んだ思想と呼応するものを見

ていた。西欧思想受容のさしあたりの受け皿として、宋明理学の「格物致知」「性即理・心即理」「修己治人」といった思想枠組みがあったことはよく知られている。

ところで人間の知徳の増大、自己の形成、社会の合理的組織化を標榜する東西両思想の類同性は偶合、あるいは各自独立の併行現象だったとも説明できるであろう。ただ日中両国の識者が感じとった両思想の類似性には、別な理由がなかったであろうか？

実は日本・中国が学習の対象としようとした西欧近代思想形成期に、異文化の情報が流入していた。それは主にキリスト教宣教師、とりわけイエズス会士らによる新世界や、日本・中国からの情報であった。宣教師マテオ・リッチは、東洋布教の使徒ザヴィエルの遺志を継ぎ、儒家古典を徹底して研究し、その情報をヨーロッパに送信する。同僚ミケーレ・ルッジェリは最古の四書の試訳を行い、これはのちにプロテスタントの学者ゴットリーブ・シュピツェルによる東洋哲学概要『中国学芸論』（1660）に収められる。これに次ぐ「四書」の訳文にはルイ 14 世の命を受けたフィリップ・クプレらによる『中国の哲学者孔子』（1687）、フランソワ・ノエルによる『中華帝国の六古典』（1711）等がある。それら訳文は、朱熹が体系化し、宋～明に発展充実した宋明理学の人間本性重視の儒家古典を「理」を仲立ちとして首尾一貫した整合化・体系化を経た合理的解釈の注釈群にもとづいていた。『四書章句集註』『四書五経大全』、張居正『四書直解』等々がそれである。

それら情報は近代理性重視の哲学者によって取得され、ひいては受容される場所があった、例えばヘーゲルはクプレ書から中国儒教・道教・仏教の概要を知り、四書に目を通し、『論語』について言及している（批判的ではあるが）。ヘルダーは複数の宣教師訳文に依拠して『中庸』をドイツ語抄訳している。カントが中国の地理情報についての知見があったことは知られているが、哲学的思惟方法を中国哲学研究者ビルフィンガーを通じて間接的に得ていた可能性がある。ドイツ初期啓蒙主義のリーダー、クリスチャン・ヴォルフは中国哲学をヨーロッパの理想となると述べ、ハレ大学学長退任時の講演『中国実践哲学講演』で、四書五経の複数の訳文を縦横に駆使し、『大学』の八條目・格物致知説などに言及して、孔子をイエス・キリストに比肩する徳の教師として称揚した。また最晩年に『中国自然神学論』を著わした中国狂 Sinophile ライプニッツはそれに先立つ 30 年以前に『中国学芸論』に触れていたが、本書には所載のアジアの普遍記号、漢字、易の二元論 binarium や最古の『大学』の充足理由律にも世界観、またモナド monade の語も見える。

すなわち文献情報を通じた東洋哲学のヨーロッパ西漸からの考察も必要になるのではなかろうか。本発表ではその観点の可能性について論じてみたい。

論理学者にとっての中国哲学——金岳霖、沈有鼎を中心に

志野 好伸（明治大学）

「中国哲学」とは何か。それは「中国的」な哲学なのか、それとも「中国人」が行う哲学、行ってきた哲学なのか、あるいは「中国語」で行われる哲学、行われてきた哲学なのか。また「中国」という修飾語がつくことで、「哲学」それ自体が揺さぶりをかけられ、新たな問いの場が開かれているのだろうか。本発表で主にとりあげるのは、「中国的」という特徴を見だし難い哲学、論理学を欧米で本格的に学び、論理学を研究した中国人哲学者、金岳霖(1895-1984)と沈有鼎(1908-1989)である。ラッセルの著作に影響を受けた金岳霖は、1935年に『論理』を上梓したのち、1940年に『論道』を公表、「道」をはじめとする中国の伝統的な概念を分析した。また、1943年に英文で"Chinese Philosophy"と題する論稿を執筆、中国哲学と西洋哲学を比較している。フッサールに指導を受けた沈有鼎は英語や中国語で論理学の論文を発表するかたわら、『易』や墨子の論理を明らかにしようとした。沈有鼎にも、「中国哲学今後の開展」（1937）と題する、中国哲学と西洋哲学を比較した論文がある。彼らは、中国の伝統的思想を対象としてとりあげることに、どのような意味を見いだしていたのか。それは中国の伝統思想を素材として、彼らが学んだ西洋的論理学を応用したにすぎないのか。すなわち

(西洋) 哲学を利用して「中国」に対して貢献するものだったのか。それとも西洋的論理学に何らかの反省を迫る作業、すなわち「中国」を利用して「哲学」そのものに貢献するものだったのか。金岳霖の「道」に関する分析は、同時期に馮友蘭が著した『新原道』とどのような点で決定的な違いを生じているのか。沈有鼎の成果は、墨子の論理学を取り出して提示した梁啓超や胡適の分析視角とどのように異なるのか。こうした問いを検討することで、「中国哲学」と呼ばれるものの可能性を少しでも広げたい。

東アジア哲学の理念と牟宗三

朝倉 友海 (神戸市外国語大学)

東アジア思想への関心は従来、中国や日本など個別の社会への関心と強く結びついてきた。だが近年、「(未来主義) などの一部を除き) 社会文化的関心が低下する反面、思想そのものへの理論的関心が高まる傾向が見られ、それに伴い、「東アジア哲学」の理念のもとで、思想的遺産の東アジアでの共有という事実が再考を求められている。かつて新儒家運動などに典型的に見られた「中国哲学」構想とは異質とも考えられるこうした観点をめぐって、本発表では、新儒家的構図からはみ出る内容が多く含まれている牟宗三の議論を再構成することで、そこにはすぐれて「東アジア哲学」の理念へと結びつく理論が見出されることを示す。そして、普遍的なものへ向けた中国思想からの哲学的貢献の可能性を、牟宗三哲学の位置づけの変更を通して検討する。

[シンポジウム報告者・コメンテーター紹介]

◇李 晨陽 (Li Chenyang)

シンガポール南洋工科大学教授。専門は中国哲学と比較哲学。北京大学を卒業後 (学士と修士)、コネチカット大学で博士号を取得。ワシントン大学を経て、現在に至る。代表作として、*The Confucian Philosophy of Harmony* (2014), *The Tao Encounters the West: Explorations in Comparative Philosophy* (1999), *The Sage and the Second Sex: Confucianism, Ethics, and Gender* (ed., 2000), *The East Asian Challenge for Democracy: Political Meritocracy in Comparative Perspective* (co-edited with Daniel A. Bell, 2013), *Moral Cultivation and Confucian Character* (co-edited with Peimin Ni), *Chinese Metaphysics and Its Problems* (co-edited with Franklin Perkins, 2015) などがある。

◇張 志強

中国社会科学院哲学研究所副所長・研究員、中国社会科学院研究生院哲学系教授。『哲学動態』、『中国哲学年鑑』主編。中国哲学史会副会長。中国哲学史会『中国哲学史』編集委員・副主編。主な著作に『重新講述蒙元史』(編著、生活・読書・新知三聯書店、2016年)、『朱陸・孔仏・現代思想』(中国社会科学出版社、2012年)。論文に、「超越民族主義：多元一体的清代中国—対新清史的回応」(『文化縦横』2016年4月号)、「一種倫理民族主義是否可能？—論章太炎的民族主義」(『哲学動態』2015年第3期)、「伝統と現代中国：最近一〇年来の中国国内における伝統復興現象の社会文化的文脈に関する分析」(『現代思想』2014年3月号)、「「全体仏教」の理想と中国仏教近代化改革の主な意義：欧陽竟無と太虚の中国仏教改革プランの比較」(『東アジア仏教研究』第11号、2013年) 他多数。

◇石井 剛 (いしい つよし)

東京大学大学院総合文化研究科教授。中国近代哲学・思想史。博士（文学）。主な著作に『斉物的哲学：章太炎与中国現代思想的東亜経験』（華東師範大学出版社、2016年）、『戴震と中国近代哲学 漢学から哲学へ』（知泉書館、2014年）、『ことばを紡ぐための哲学』（中島隆博との共編著、白水社、2019年）など。

◇井川 義次 (いがわ よしつぐ)

筑波大学人文社会科学部研究科哲学・思想教授（中国哲学）。博士（文学）。主な著作・論文：『宋学の西遷』（人文書院、2009年）「十七世紀イエズス会士の『易』解釈—『中国の哲学者孔子』の「謙」卦をめぐる有神論性の主張」（日本中国学会『日本中国学会報』第48集、1996年、日本中国学会賞哲学部門受賞）など。

◇志野 好伸 (しの よしのぶ)

明治大学文学部教授。専門は中国哲学、中国哲学史。東京大学大学院人文社会系研究科で博士号を取得。共著に『いま、哲学がはじまる。一明大文学部からの挑戦』（2018）、『聖と狂：聖人・真人・狂者』（2016）、論文に「洪耀勳的實存概念之探討」（鄧敦民・洪子偉主編『啓蒙與反叛：臺灣哲學的百年浪潮』所収、2019年）など、共訳書にフランソワ・ジュリアン『道徳を基礎づける——孟子 vs. カント、ルソー、ニーチェ』（2017改訂版）、アンヌ・チャン著『中国思想史』（2010）などがある。

◇朝倉 友海 (あさくら ともみ)

神戸市外国語大学准教授。京都大学理学部卒業、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（哲学）修了、博士（文学）。著書に『「東アジアに哲学はない」のか：京都学派と新儒家』（2014）、『概念と個別性：スピノザ哲学研究』（2012）、共著に『哲学すること：松永澄夫への異議と答弁』（2017）、『主体の論理・概念の倫理：二〇世紀フランスのエピステモロジーとスピノザ主義』（2017）、『東亞傳統與現代哲學中的自我與個人』（2015）など。

◇納富 信留 (のうとみ のぶる)

東京大学大学院人文社会系研究科教授（哲学）。専門は西洋古代哲学と西洋古典学。東京大学で哲学を学んだ後（学士と修士）、英国ケンブリッジ大学で古典学で博士号を取得。九州大学、慶應義塾大学を経て、現在に至る。代表作として、『プラトンとの哲学』（岩波新書、2015年）、『ソフィストとは誰か？』（人文書院、2006年；新版、ちくま学芸文庫、2015年）、*The Unity of Plato's Sophist: Between the Sophist and the Philosopher* (Cambridge University Press, 1999) などがある。

◇石田 正人 (いしだ まさと)

ハワイ大学マノア校人文学部哲学科准教授。アメリカ古典哲学、日本哲学、論理学史。論文に「西田、ジェイムズ、パースの比較試論 —『善の研究』における論理的なるもの」（西田哲学会、2011年）、「Non-Dualism after Fukushima? Tracing Dogen's Teaching vis-à-vis Nuclear Disaster」(*Japanese Environmental Philosophy*, Oxford UP, 2017年所収)、「Ifa Fuyū's Search for Okinawan-Japanese Identity」(*Religions*, 2018)ほか。共訳書にクリストファー・フックウェイ著『プラグマティズムの格率：パースとプラグマティズム』（春秋社、2018年）など。